死神ウェンディ

瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神ウェンディ

【Ｎコード】
Ｎ６００５Ａ

【作者名】
瑠璃

【あらすじ】
死神である私が見える者。簡単に言えば、死期が近い者である。そんな彼らの臨終を見舞い、彼らをあの世へと導くのが、死神である私の役目である。それと同時に死の安寧を乱す存在。悪魔の類から死者の魂を守護する役割も担っている。そんな死神である私は、日本のとある地方都市の病院に長期入院する少女、水瀬遥の残り少ない命の灯火が消えるその瞬間まで彼女を陰ながら守護していた。

プロローグ（前書き）

雉飼　狂子の野望という小説も投稿しています＾＾

プロローグ

人間とは奇妙でおかしな行動に満ちあふれた生き物である、と言っても半ば間違ってはいないのかも知れない。
目の前の対象物、それがなんであれ固有名称、不確定名、とにかく名前をつけなければ気が済まない衝動を抑えられないという私には、そんな行為のなにが面白いのか、それが理解できなかった。

名前など、あってもなくても。いや、目の前に現れた私が、自分をあの世への水先案内人である死神であると、それが認識できれば、それでいいだろう？　そう思えるところだが、敢えてあの娘は私にウェンディと名付ける。

私はピーターパンと一緒にネバーランドへと行った少女の名前を与えられた。
別に嫌気の感じる不快な名前ではないのだが不思議な気分だ。そして複雑な気分だ。

なにはともあれ。
ウェンディという名を与えられた死神である私は、今日も名付け親となった娘、水瀬　遥の残り少ない命の灯火が消えるその瞬間を待っていた。

第一話「少女と死神」ａｃｔ．１（前書き）

登場人物の紹介もしておいた方がいいかなと思えるのでちょっとだけｗ

【ウェンディ】
外見年齢２５歳くらいの若い女性の姿をした死神。
髪型は黒髪でショートカット。思わず見惚れてしまうほどの容姿端麗な姿をしているが、物腰は冷ややか。
格好はニットのセーターとジーンズ。

【水瀬　遥】
大病を患って入院している１４歳の女の子。
明るく取り繕っているいるがかなり無理をしている。

第一話「少女と死神」act．1

第一話「少女と死神」act．1

その少女、水瀬　遥はいつも病室の窓から外の光景を眺めていた。
その姿を見ていると、雲ひとつない青い空を自由に飛びまわりたい――と切に願う鳥篭の中の小鳥のように思える儚さを感じてしまう。

「ウェンディ、そこにいるの？」
「ああ、いるとも」
そんな水瀬　遥の呼び声に私は答える。
とりあえず、個室である故、遥以外、他の入院患者はいないのだが、私の姿は彼女にしか見えない。
以前、６人部屋の病室に遥がいたことがある。
そこで私は彼女と出逢った。

さて、人間とは特異な者を忌避したがる傾向が特に強い生物である。
彼女と、他の人間にはその姿が見えることがない私との会話は、他人の眼を介すと独り言、気味の悪い一人芝居に見えたのだろうか？
それが起因し、遥の陰口を言いふらす同じ病室の心無い人間のせいで、今では薄気味の悪い独り言娘という名称が定着しつつあった。
そんな頃、丁度よく遥の病状が悪化、それで今の個室へ移されたわけである。

水瀬　遥は幼い頃から入退院を繰り返している病弱な娘だ。
何度も死にかけるほどの大病を患うが、死神である私ですら、圧倒されるような生命力を発揮し、１４歳になる今日まで生き延びてきたのだ。
それはともかく。
私が見える、ということは死期が近いということだ。

「うふふ、あたしがつけてあげた名前……。気に入ってくれたかな？」
遥は自分を迎えに来た死神である私に、ウェンディという名前をつける。
ピーターパンと一緒にネバーランドへと出かけた少女と同じ名前だっただろうか？
まあ、名前なんて必要としない。死を迎える対象物が、私のことを死神である、と認識すれば、それでいいと思うのだが……。
「とりあえず、その名前で呼ばれても別段、嫌ではないな」
別段、嫌な名前ではない、というわけで、私はウェンディと呼ばれてもいいかな、と思った。
それに私は死神とはいえ、女性である。男の名前をつけられたら――と思うよりずっとマシだろう。

「うは、あたしがコーディネイトした服をちゃんと着てくれたんだね♪」
「服！？　このニットのセーターとジーンズのことかな？」
「うんうん、この間のあの服よりずっといいよ」
「うむ、人間の趣味にはついて行けないところがあるけど、まあ、気に入っているかもしれないな、この服」
遥は私にニットのセーターとジーンズが似合う、と衣装を変えるように勧めてくる。
とりあえず、彼女の気休めに付き合ってやるのもいいかと思った

ので、彼女に勧められたとおり、ニットのセーターとジーンズに私は着替えてみることにする。

「そういえば、ウェンディと同じ、死神さんじゃないかなって感じのお姉ちゃんに会ったよ」

「なにっ！？　私以外の死神が、この病院に――」

「うん、真っ赤なパーティードレスを着たお姉ちゃんだったよ」

私以外にも死神を見た、と言う遥。で、赤いパーティードレスを着ていた、という。

（あいつか！）

当然、私には見覚えがあった。

「で、その死神お姉ちゃんにアリスという名前をつけてあげたの♪」

遥は嬉しそうに、真っ赤なパーティードレスを着た死神にアリスと名付けた、と言う。

第一話「少女と死神」ａｃｔ．２（前書き）

新キャラを登場させます＾＾

第一話「少女と死神」act．2

第一話「少女と死神」act．2

日本の某都道府県に属する日暮島――１９９０年代末期、結局当たりはしなかったが中世ヨーロッパの預言者ノストラダムスの人類滅亡を予期する予言とやらで沸き立った時代に急速に発展を遂げ、今では日本の首都である東京の新宿並みの高層ビル群や、ヲタクと呼ばれる者たちの聖地、メイド喫茶、著名な大型家電製品販売店等が軒を連ねる秋葉原をも数年後には凌駕するのでは、とマスコミから過大評価を受ける賑やかな繁華街がある一方で、穏やかでなにもない閑静な住宅街も存在する。

そんな日暮島にある坂野上総合病院、そこに私は――ウェンディという名を与えられた死神はいた。

「まったく、病院で作られる食べ物は味が薄すぎだお！　あたしの口に合う料理を作れっつうの！」

派手な真っ赤なパーティードレスとハイヒール、それにブランド物のバッグをたずさえた長身痩躯で金髪碧眼の美女は、ムスッと不機嫌そうに眉をひそめながら、坂野上総合病院一階にある入院患者たちの朝昼晩の３食を作っている調理室の中をうろついていた。

ちなみに、この女はこんな姿をしてはいるが、私と同じ死神である故、彼女が見える者は死期が近い者限定――ということで調理室にいる者たちには、その姿が見えてはいない。

「ふん、この病院で美味しい食べ物を口にできる機会は、入院患者を見舞いに来る家族たちが持参したお菓子くらいだお！」

女は、自分の姿が見えないことをいいことに、調理室にある冷蔵

庫の中を漁り、苺、バナナ、巨峰といった果物を手当たり次第に食べまくる。
「おい、貴様！　そこでなにをやっている！」
その様子を見ていて不快な気分を募らせる私は、大きな声で女を叱咤する。当然、私の声は叱咤をした対象物の女以外、聴こえない。
それはともかく。
「ア・リ・スだお！　あたしの名はアリスだお。そう呼んで欲しいお」
私の叱咤する大声に反応し、この調理室の冷蔵庫の中を漁り苺などの果実を盗みぐいする女は、左手にバナナを、右手に巨峰、口の中には苺をくわえたそんな状態で振り返ると、自分のことをアリスと呼べ、と言う。

「私はお前のように普通の人間に姿が見えない、ということを利用して食い意地を張った真似だけはせんぞ。その前にお前にはプライドがないのか？」
私は再び、アリスという名の死神を叱咤する。
「ん、まあいいじゃない。それにお腹が空いたんだお」
アリスは私に叱咤されたことをまったく気にしていない様子だ。それどころか、再び冷蔵庫の中をさらに漁り始める。
「とりあえず、止めておけ」
私は溜息をつきながら、冷蔵庫の中を漁るアリスのそんな行動を制止させるのだった。

「ウェンディ♪　可愛らしい名前をつけてもらったものねぇ、うふふ♪」
「ふ、可愛らしいか……。まあ、嫌な名前ではないな」
水瀬　遥によって与えられたウェンディという私の名前に対し、アリスは可愛らしい、と言いながらバナナを口にくわえる。
「ところで貴女もなにか食べる？」

「いや、遠慮しておく」
「あらあら、つまらないお」
「お前と違って盗み食いをするような真似だけはせん」
「ふ～ん……。あ、思い出したお。この病院内で悪魔を目撃したお！」
「な、なに！？　悪魔が出ただと！」
しばしば、アリスとくだらない雑談を繰り返す。が、アリスがこの坂野上総合病院内で悪魔を見かけた、と口にする。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6005a/

死神ウェンディ

2010年10月10日19時15分発行